

## 「2023年度中国・浙江大学スプリングスクール派遣報告書」

京都大学文学部1年 藤井 優羽

私がこのプログラムに参加しようと考えたのは、一度海外生活を経験してみたいと何となく考えていたこと、何より、参加費用が自分で出せる額であり、大学からも補助が出るということが理由でした。崇高な理由ではありません。語学についても、中国語を第二外国語として選んでいたの、少しは話す力を伸ばし、成績も上げられたらいいな、程度にしか考えておらず、学習意欲も高くありませんでした。

しかし、二週間のプログラムを通し、異文化交流、そして何より語学学習に対する意識が、大きく変わりました。浙江大学では、世界各国から来ている長期留学生の授業に参加させてもらう形で、中国語の授業を受けました。そこで出会った留学生は、みな私よりも中国語の学習歴が短く、一から漢字を勉強していました。それにも関わらず、授業中も積極的に挙手して先生の質問に答え、リスニングの問題をすらすらと解いていました。私とは言えば、先生とクラスメイトの会話を聞き取るのに必死で、挙手する余裕などなく、リスニング教材は一切聞き取れず、問題を一問も解けずに固まる始末。自分の聞き取りの力の弱さに愕然としました。クラスメイトとのやり取りや、現地学生とのディスカッションでは英語を使用しましたが、そこでも自分の言いたいことをうまく表現できずに固まり、他の参加者の方のように、留学生と仲良くなることがほとんどできませんでした。

また、プログラムは、午前中は授業、午後は博物館や観光地を案内してもらったり、自分たちだけで自由に観光したりするという形で行われました。しかし私は、自由行動の時も、コミュニケーションの不安や積極性のなさから、他の日本人参加者についていくことがほとんどで、結局日本語を話してばかりいました。折角海外で、現地の人とも、他国からの留学生とも交流できる環境にいたにも関わらず、積極的に他言語を使おうとしなかったことは、私の最大の失敗であり、反省点であると思っています。

今回のプログラムで、英語・中国語ともに、リスニング・スピーキング能力の弱さを痛感したこと、日本語以外のコミュニケーションを積極的に取れず後悔したこと、もっと他言語を話せるようになりたいという思い、そして、長期の留学をしてみたいという思いが生まれました。海外進学については、まだ具体的に考えることはできていませんが、将来の選択肢の一つとして、視野に入れることも考えるようになりました。語学学習にモチベーションがなく、単位が取ればいい、と思っていた私にとって、これは非常に大きな変化でした。

最後に、私にとって、このプログラムは、「人の温かさ」を再確認するものでした。現在の日中関係から、日本人だと拒絶されることを不安に思っていたのですが、プログラム中、「日本人だから」と嫌な思いをしたことは一度もありませんでした。ただ運が良かっただけかもしれませんが、このプログラム期間は、胃腸炎に罹り、病院に行くことになった私に、夜遅い時間にも関わらず同行してくれたボランティアの方、書店で「日本の風景と文化が好き」と声をかけてくれた男性、食堂で注文方法がわからず戸惑っていた時、助けてくれたインドネシア人留学生の方、など、たくさんの人に触れ、助けられた二週間でした。そして、世界には私の知らないことがあふれているのだと実感し、語学学習と異文化交流への意欲を高めることができた二週間でもありました。本当に良い経験ができたと思います。私に関わってくれたすべての人に、感謝を述べたいです。ありがとうございました。